

住吉広行による「木筆三十六歌仙」の模写について

下 原 美 保

はじめに

松浦史料博物館には江戸時代後期に写された古画の模写が多数収蔵されている。これらは平戸藩九代藩主松浦静山⁽¹⁾（一七六〇～一八四一）が自ら、あるいは絵師に依頼して模写させたものである。中でも目を引くのが、木片を細かく割いて刷毛状にした木筆による三十六歌仙の模写である（以下、松浦史料博物館とする）（図1～9）。原本はかつて水戸府が所蔵したもので、静山の依頼により、幕府の御用絵師住吉広行（一七五四～一八一二）がこれを写したという。いわゆる藤原公任撰三十六歌仙に加え、歌仙絵としては珍しい住吉杜の鳥居と松（図9）が描かれ、色紙形にはそれぞれの和歌が記されている。

模写の経緯については柴野栗山（一七三六～一八〇七）による序文（図1）や、静山の記した『新增書目』『木筆三十六歌仙』の項目（内篇卷七上）に詳しい。『新增書目』とは、平戸に置かれた静山の蔵書（感恩斎文庫）の目録であるが、ここには書籍だけでなく、古画の模写も項

目を立てられ、その経緯や原本の画題、さらには制作年代や筆者、画風に至るまで、根拠となる文献や識者の助言をもとに、静山の所見が書き綴られている。

本論では、この『新增書目』に注目しながら、松浦史料博物館本の模写の経緯や、木筆に関する情報、原本の作者についての当時の認識、さらには住吉広行の古画模写のあり方やその評価、広行による「木筆古歌仙」の鑑定について確認していきたい。

水戸府旧蔵の「木筆三十六歌仙絵巻」と近世の模写

松浦史料博物館本は儒学者である柴野栗山の序文から始まる。序文右下に確認できるのが、静山の所蔵印「平戸藩蔵書」と「楽斎堂文庫」（ともに朱文方印）である。

木筆が用いられているのは、主に歌仙の衣紋線や冠などの装飾物で、これらは木筆の特徴である刷毛目によって表現されている。また、震えるような細かな波線がアクセントとし盛り込まれており、墨を主体とし

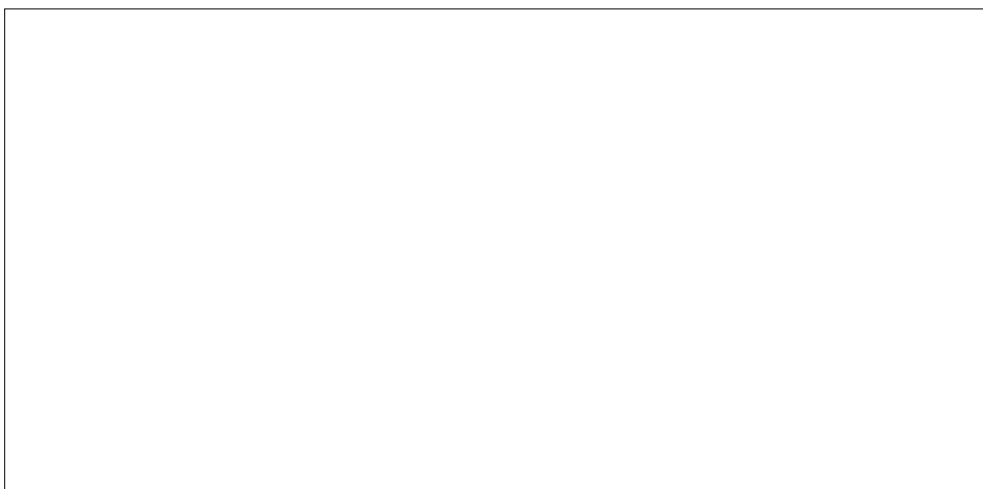


図1 「木筆三十六歌仙（部分）」（住吉広行・模写）（序文）（松浦史料博物館）

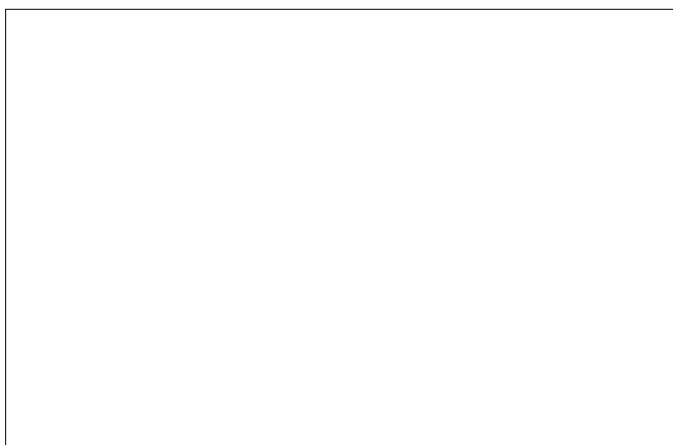


図2 「木筆三十六歌仙（部分）」（住吉広行・模写）（柿本人麻呂）（松浦史料博物館）

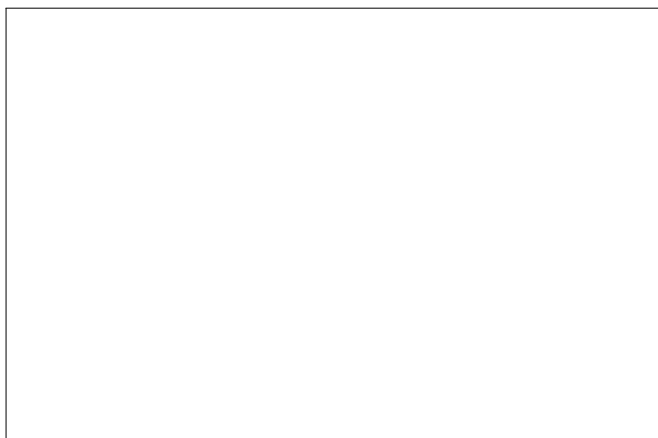


図3 「木筆三十六歌仙（部分）」（住吉広行・模写）（在原業平）（松浦史料博物館）

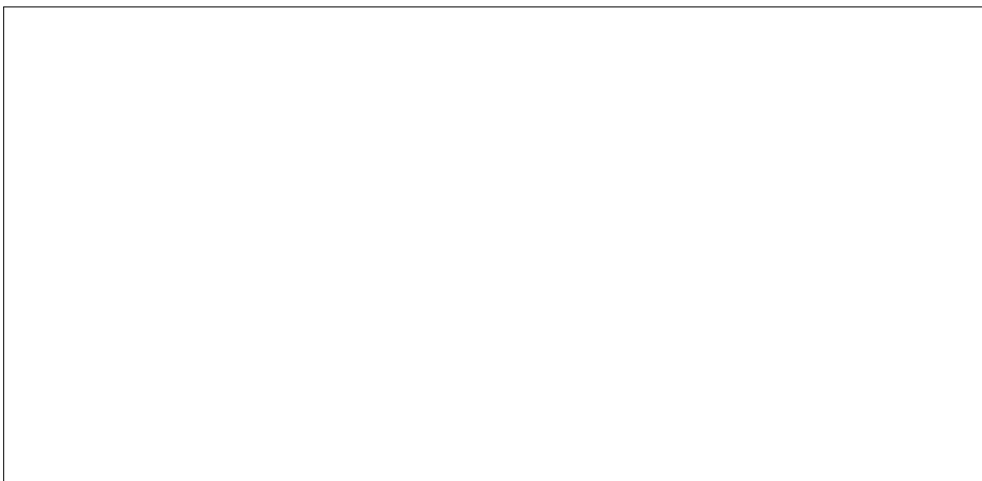


図4 「木筆三十六歌仙（部分）」（住吉広行・模写）（藤原仲文・壬生忠峯・源信明）（松浦史料博物館）

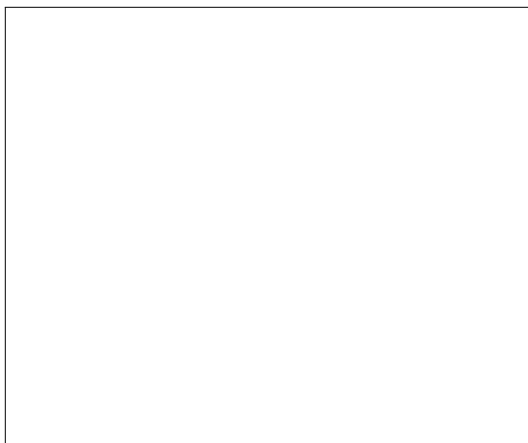


図5 「木筆三十六歌仙（部分）」（住吉広行・模写）（藤原敦忠）（松浦史料博物館）

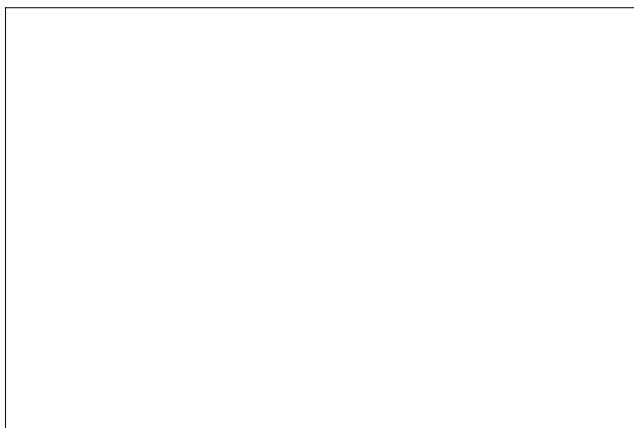


図6 「木筆三十六歌仙（部分）」（住吉広行・模写）（小野小町）（松浦史料博物館）

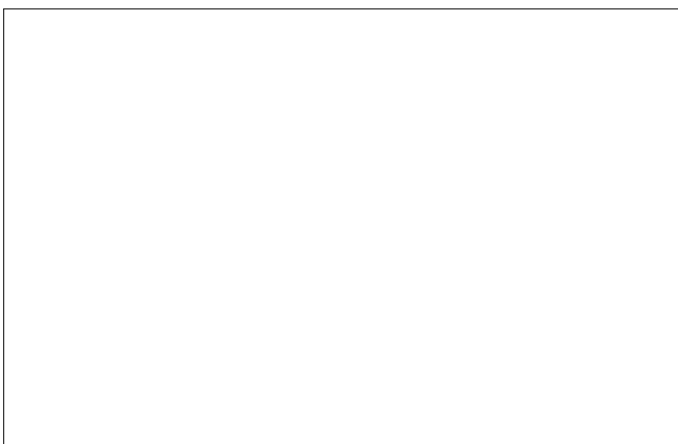


図7 「木筆三十六歌仙（部分）」（住吉広行・模写）（伊勢）（松浦史料博物館）

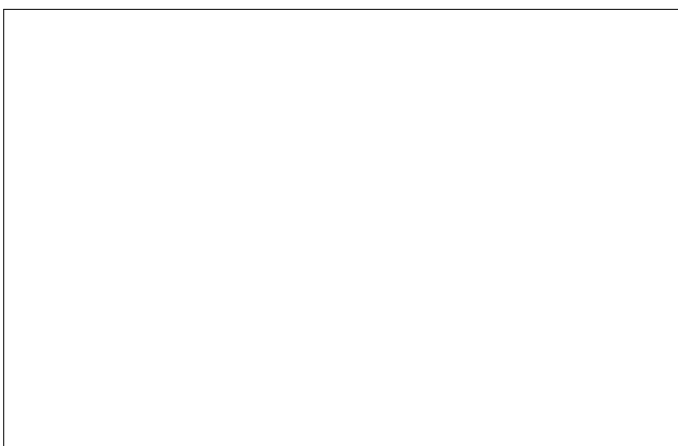


図8 「木筆三十六歌仙（部分）」（住吉広行・模写）（山辺赤人）（松浦史料博物館）

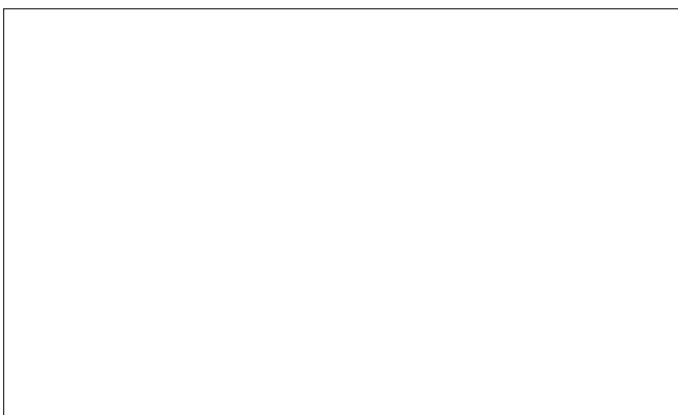


図9 「木筆三十六歌仙（部分）」（住吉広行・模写）（住吉明神）（松浦史料博物館）

た歌仙絵でありながらも、華やかな雰囲気をもつ。

松浦史料博物館本の原本、あるいはそれに準ずる作品と推測されるのが、徳川博物館所蔵の「木筆三十六歌仙絵巻」(以下、徳川博物館本とする)⁽²⁾である。二〇〇七年に開催された「大徳川展」の図録によると、同本は室町時代に制作されたもので、絵画は土佐光顕筆と、和歌は二条為世筆と伝えられてきた。松浦史料博物館本と徳川博物館本とは、歌仙の表情、木筆による衣紋線の刷毛目の細部、さらには色紙型下絵の文様や和歌の書体まで近似している。

松浦史料博物館本と同様に、同画題の近世の写しと考えられるのが、東京国立博物館の模写で(以下、東博本とする)⁽³⁾、巻頭には「不忍文庫」の朱文長方印が確認できる。不忍文庫とは、国学者で蔵書家としても知られる屋代弘賢(一七五八―一八四二)の収蔵書のことである。東博本が弘賢の時代の模写であれば、松浦史料博物館本と同時代の模写となる。実際、静山と弘賢とは交友関係にあった。『新增書目』には、弘賢から「待賢門合戦絵詞」の模写を借り、静山自身がこれを写したというエピソードが残っている⁽⁴⁾。東博本も木筆を用いて描かれており、歌仙の姿や色紙の下絵は徳川博物館本、松浦史料博物館本とほぼ同様で、やはり水戸徳川家伝来本の写しとされている。

『新增書目』にみる「木筆三十六歌仙」

次に、『新增書目』の「木筆三十六歌仙」の項目より、松浦史料博物

住吉広行による「木筆三十六歌仙」の模写について

館本に関する情報を抽出してみたい。

●木筆三十六歌仙 越前守光顕筆

一軸

此図住吉内記廣行ノ粉本ニ就テ模ス。即廣行ニ乞テ其所画ナリ。其図ノ奇巧ヲ悦バシム。木筆並此画ノ説。柴彦輔ノ序文ニ詳ナリ。左ニ記ス。歌仙ノ像毎ニ。其上色紙形ヲ画ク。其様亦奇趣。卷末ニ華表ヲ画ク。傍ニ松樹アリ。其上ニ住吉ノ神詠ヲ書ス。蓋住吉之社ナリ。○序。住吉画博廣行。乎模下木筆画三十六歌仙一巻上。原本水戸府秘蔵也。廣行審定。為其先越前守光顕真蹟。筆力矯健。變化自在。実妙跡也。按東觀余論曰。唐太宗飛白。皆用相思為三板。若髹刷然。呼為木筆。本朝画伝載。根来寺僧覺鑊及賢正智海等木筆善梵書。目作不動及渡唐天神像事。又住吉氏家乘云。其先刑部光信。嘗応源大將軍東山公命。木笔画野馬。又其家訣。木筆以木槿造云。挾此数説。則木筆本出自飛白書。僧家以下其便作梵篆。取而用之。其余巧變為墨技。遂流入画家。成一体也。今世久絶其技。雖以壽官子弟如土佐住吉諸家。但伝其訣。而不能蔵古蹟粉本也。廣行一曰。觀此本。大驚以為奇遭。費数十日工。模取。筆ニ必慎。毫髪無所失。其可下与原本一弁上者。独紙墨新陳耳。亦精絶也。寛政乙卯季秋東讃柴邦彦題。○廣行曰。光顕ハ元徳ノ頃ノ人。事蹟土蜘蛛絵巻物ノ条ニ記ス。元徳ハ後醍醐帝ノ年号。元弘ノ前年。

〔『新增書目』内篇卷七上「雜二 画図ノ中之部 模写」〕

(傍線部は原本のまま)

上記の同項目によると、松浦史料博物館本は住吉広行が所蔵していた「木筆三十六歌仙」の模写を、静山が広行に依頼してさらに模写させたものであるという。模写の詳しい経緯については、栗山の序文を引用しながら以下のように紹介している。

住吉広行が模写した木筆三十六歌仙は、水戸府に原本が秘蔵されている。広行はこの絵巻（原本）を先の越前守光頭の実蹟とみなした。その作風は筆力矯健、変化自在で実に妙跡である。『東観余論』⁽⁵⁾によると、唐の太宗による飛白は、皆、相思（樹）の木片を用い、これが漆を塗る（刷毛の）ようであるため、木筆と呼んだという。『本朝画伝』では、根来寺の僧である覚鑊や賢正智海などが梵書を得意とし、不動や渡唐天神像を木筆で描き、住吉家の家伝では、土佐光信が足利義政の命に应じて木筆の野馬を描いたという。住吉家の奥義では、筆は木槿を使ったとされる。また、諸説によると、木筆はもともと飛白書より出て、僧家で梵書や篆書を書くために用いたとされる。その優れた技巧は変じて墨技となり、遂に画家に取り入れられ、一つの絵画様式になった。しかし、現在ではその技は絶えて久しく、宮廷に仕えた土佐・住吉の諸家といえども、その奥義を伝え、古蹟粉本を所蔵することはできなかった。ある日、広行の語るところによると、この本（木筆三十六歌仙）との奇遇に驚き、数十日かけて写しとったという。慎重に筆を運びながら模写され、描き漏らした部分はなく、原本との違いは紙と墨だけであった。こ

の序文は寛政七年（一七九五）秋に、柴邦彦、すなわち柴野栗山が記したものである。

静山は続けて、原本の作者土佐光頭が元徳頃の人物であるとする広行の見解を紹介し、元徳は後醍醐帝の年号であり、元寇の前年であると説明している。また、光頭の事跡については、「土蜘蛛絵巻物」の項目に記したと補足する。内篇巻七上に掲載された同項目では、広行の父内記がこの絵巻の筆者を光頭と鑑定し、静山もこれに同意している⁽⁶⁾。

住吉広行の古画模写と「木筆古歌仙」の鑑定

さて、木筆三十六歌仙を模写した住吉広行であるが、同家では初代如慶による「年中行事絵巻」の模写を嚆矢に、代々古画の模写を手掛け、これを蓄積してきた。「住吉家古画留書」（東京藝術大学美術館）などはその一例である⁽⁷⁾。住吉派の絵師にとつて古画の模写は、伝統的な図様や絵画技法を習得するのに有効な手段であり、二代目具慶以来、御用絵師を踏襲した彼らの絵画制作にも大いに活かされてきた。

一方、静山の依頼による木筆三十六歌仙の模写は、ビジュアルな絵画情報を他者から求められた事例であり、この他にも広行は、「大臣影絵巻物」の模写を静山から依頼されている。『新增書目』『大臣影絵巻物』（内篇巻六坤）を読むと⁽⁸⁾、先代の広守（一七〇五〜七七）がこれを実見し、広行自身も「家業為心得」、朝廷に模写を申し出たとある。ではなぜ、静山は古画の模写のさらなる写しを他の流派の絵師ではな

く度々広行に依頼したのであろうか。その理由は、同家が宮廷絵所の流れを汲む土佐派の分派という正当性と、同派に蓄積された膨大な模写、しかも「年中行事絵巻」に代表されるように、原本に近い写しを有していたことがその理由と考えられる。さらに広行の模写は、栗山が語るように、細心の注意を払いながら進められ、原本と変わらぬほどの出来映えであったという。静山もこのことを知り、高く評価していたのである。

模写に対する広行のこだわりは、『新增書目』「兆殿司像」の項目（内篇卷六坤）からもうかがい知ることができる⁽⁹⁾。静山が所有する兆殿司の肖像は、広尚（一七八一〜一八二八）が所蔵する模写を、静山が文化十三年（一八一六）の夏に写したものである⁽¹⁰⁾。もともとこの像には、兆殿司が五百羅漢図を制作していた際、老いた母の元へ自分が戻れない代わりに自画像を描いて送ったという逸話が残る。

この模写は、安永三年（一七七四）に東福寺が江戸で出開帳を行った際、浅草某所にもたらされたもので、広行はこのことを聞きつけ、同所でその像を見たという。広行はこの像の模写を、再三、僧に願ひ出すが、なかなか許されなかった。そこで、ある夜密かに（浅草某所へ）訪れ、再度、模写を懇願する。ようやく僧はこの願ひを受け入れ、広行の模写が実現することとなる。後年、東福寺は火災でこの像を焼失し、広行の模写だけが残る。静山はこのことを「誠二廣行ノ画道ニ忠功アル善スベクシテ（中略）廣行ナカリ微セバ、今其豈此像ヲ視ル者有ンヤ也」と記し、広行の画道に対する真摯な姿勢を賞賛している。

卓越した模写の画技とその知識を認められた広行は、寛政度の内裏造

宮の際に、御所再建の総責任者である松平定信（一七五九〜一八二九）より、病没した狩野典信（一七三〇〜九〇）に代わって賢聖障子絵制作を下命される。この時定信は古式復興を目指した光格天皇の意向を受け、柴野栗山に命じて賢聖障子絵の賛文や図様の考証を行わせた。広行はこの絵を江戸で制作した後、御所へ送っているが、これを視察するため、寛政四年（一七九二）十月七日に上洛している。その際、同じく定信から下命されたのが、近畿地方における諸社寺の什物調査である。広行とともに抜擢されたのが、幕府の右筆で国学者である屋代弘賢（一七五八〜一八四一）、住吉家から分かれた板谷家の絵師広長（一七六〇〜一八一四）、そして柴野栗山である。広行の「上京日記」によると⁽¹¹⁾、広行は同年十月二二日に上洛した栗山を伴い、主だった社寺の宝物を点検し、誓願寺縁起や法隆寺三経院の太子縁起、當麻寺の曼荼羅及び多武峰の大織冠之図を模写し、鳳凰堂壁画の地取りを行ったという。この間、広行らは東大寺の鴨毛屏風や高尾の山水屏風、十二天像などを実際に見学している。この調査旅行で収集した情報は、広行と栗山が中心となつて編纂し、同年十二月に『寺社展覧宝物目録』として定信に報告された。木筆三十六歌仙の序文が記される四年前のことである。広行と栗山は、すでに旧知の間柄であり、松平定信からも絵画考証と模写のエキスパートとして認知されていたことがわかる。

先述の通り、住吉家には如慶以来の膨大な古画の蓄積があり、代々継承されてきた。これらは、住吉家における絵画鑑定にも大いに活用され、両家は絵画鑑定の家としても広く認知されてきた。その証左として

従来から知られてきたのが「住吉家鑑定控」(東京藝術大学大学美術館)である⁽²⁾。ここには広行の鑑定控えも含まれており、広行が寺院や道具商、大名家などから依頼を受け、古絵巻や歌仙絵、仏画まで幅広く鑑定していたことがわかる。中でも注目すべきは鑑定年月日を寛政六年(一七九四)十二月十七日とする「木筆古歌仙」の鑑定控である。この鑑定依頼は「水戸宰相殿」によるもので、広行はその作者を「土佐越前守藤原光顕無疑候」とする。松浦史料博物館本の序文が翌年の秋に記されていること、また、鑑定の依頼が「水戸宰相殿」であることより、広行が鑑定した「木筆古歌仙」こそ松浦史料博物館本の原本であると考えられる。広行は栗山の序文のごとく、この機会を逃すことなく数十日をかけて入念に模写したのではないだろうか。

以上、松浦史料博物館本と『新增書目』の「木筆三十六歌仙」の項目とを照合しながら同本の模写の経緯をはじめ、当時の木筆に関する情報や原本の作者についての認識、さらには、住吉広行の古画模写に対する姿勢や柴野栗山との関係、広行に向けられた静山の評価、松浦史料博物館本の原本と考えられる「木筆古歌仙」の鑑定について紹介してきた。

周知の通り、近年日本絵画史研究の中で、模写の意義が再検討され、住吉広行の画業にも注目が集まっている⁽³⁾。小論も模写研究あるいは住吉広行研究の一助となれば幸いである。

注(1) 名は清というが隠居後に称した静山の号が一般的であるため、本論でもその号を用い、松浦静山あるいは静山と称する。

(2) 画像は「大徳川展」図録(「大徳川展」主催事務局 二〇〇七年十月十日)一五二頁に掲載
画像は東京国立博物館画像検索
https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/E_0071231 及び文化遺産オンライン
<https://bunka.ni.ac.jp/heritages/detail/381397> に掲載。文化遺産オンラインでは東博本を水戸徳川家伝来本の写しとする。

(3) 待賢門合戦繪詞 一軸
コノ一軸、屋代弘賢が得タルト聞テ、請テ模写ス、屋代が得ル者モ亦模本ナリ、
(後略)

(4) 『新增書目』内篇卷六乾「人之伝上 史余之部 画記」
『東観余論』とは北宋の文字学家である黄伯思撰の書論
●土蜘蛛繪巻物 片桐侯家蔵○享和元年辛酉主膳正貞彰応需写以贈之 一軸
(前略) ○余此図ノ画者ヲ住吉廣行ニ問ニ、彼カ所伝ノ言ハ、土佐

長隆ノ所画ト云、然トモ廣行ノ父内記親ク其図ヲ観タルニ、越前守光顕ノ所画ナル当ト云リ、廣行ハイマタ此原本ハ不レ視トナリ、又時世ヲ問ニ、長隆ノ父某、某ノ父光顕、光顕ノ父光秀ト云、光顕元徳ノ頃、長隆文和ノ頃ト書ヌレバ、元徳文和ノ際、僅ニ二十四年ト雖、徒然草ノ注ニ、兼好以ニ北朝観応元年、死、年六十八ト云バ兼好既文和ニ先テ没テ、長隆ノ画ルニ詞書スルノ理ナシ、然レバ内記ノ所云、光顕ト為者、其实ヲ得タル歟、イヅレモ四百五十年上ノ画、可ニ珍重、且宜挹レ図観中当時モノ也、享和癸亥閏正月識干江都南室

(7) 『新增書目』内篇卷七上「雜二 画図ノ中之部 模写」
『新增書目』からは、病草紙(内篇卷四之下「医書 雜病」)や氣違草子(内篇卷七上「雜二 画図ノ中之部 模写」)などの古絵巻の模写も、当時の住吉家が所有していたことが確認される。

(8) ●大臣影繪巻物 四軸
原本、画家住吉廣行所蔵、文化二年乙丑閏八月、需之廣行、因廣行自模其本而贈、
○此卷原上下二軸也、為不便展覽、今分為四軸、○原本外袋ニ記テ云、御数寄屋御道具之内ニ有之候、大臣之絵御巻物、古画之趣、先年父内記廣守

拝見仕候由、兼而申聞承知仕候、拝見之義奉願候者、奉恐入候義ニ御座候得共、家業為心得、奉願拝見仕度奉存候、何卒拝見被仰付候様ニ仕度、奉願候、以上、コレ廣行ノ所呈官ノ上書ノ文、直ニ之ヲ題記セシ者ナリ、(後略)

〔新增書目〕内篇卷六坤「人之伝 公卿 画像」

(9) ●兆殿司肖像 住吉内記廣尚之粉本文化丙子夏模写 一幅

此原図ハ、兆殿主ノ自所レ画ト云、像半身右向、風容如シ見、実ニ真肖ト為ベシ、(中略)○又此讚辭ノコトモ、画史ニ、始明兆老母在淡路国、臥病、故欲一見兆、兆時在東福寺、方画五百羅漢、其功未半、雖背老母之命、仏像画之事、又不忍捨之、因自写、真、致之於母、慰其心、退耕庵性海贊其像、曰、衣破戒不破、身貧、道不貧、此像著破衲ト見エテ、何ニモ衣ノ破タルヲ結合テ著セリ、是ニテ詳ニ知ベシ、又此図ヲ得シコトハ、住吉廣尚内記ノ粉本ヲ写ス、此粉本ノ原ハ、安永中三年ノ事ト云東福寺開扉ノコトヲ官請シ、出府シテ浅草某ノ処ニ寓ス、且東福ニ所有ノ宝物數種ヲ携フ、此図モ亦其一也、此時廣尚ノ父廣行内記聞レ之征テ此像ヲ視ル、因テ彼守僧ニ就テ之ヲ移写センコトヲ言フ、僧不許、廣行言フコト再三ニシテ、僧尚不聽、以故、廣行一日潜ニ夜往、其懇求ノ情ヲ伸テ請レ之、僧ノ心稍解ケ、竟ニ密ニ移写スルコトヲ得タリ、是斯像ノ世ニ出ル始メ也、後、然、年アリ、而東福寺災アリ、此像時ニ焼亡スト、然トキハ殿主ノ真蹟ハ、今見ルニ無シ、由ト雖ドモ、唯此図ヲ以テ觀ルベシ、誠ニ廣行ノ画道ニ忠功アル善スベクシテ、彼僧ノ愚ニシテ不慈ナル、殿主ノ画志孝思ヲモ知ザル可レ惡、讀ヲモ読得ザル者ナル應シ、廣行微セバ、今其豈此像ヲ視ル者有ン也、

〔新增書目〕内篇卷六坤「人之伝 神釈 画像」

(10) 住吉広行の模本を、さらに自ら模写した二次写本が東福寺に所蔵される。『禪寺の絵師たち―明兆・靈彩色・赤脚子―』(山口県立美術館 一九九八年十月二三日) 七一頁作品画像、一五〇頁作品解説参照

(11) 「上京日記」(『東洋美術大観』五〔審美書院 一九〇九年九月十日〕四九〇頁)

住吉広行による「木筆三十六歌仙」の模写について

(前略)

廿二日柴野栗山松平樂翁侯の命を啣みて上京す。これより栗山と共に寺社の宝物を点検し、古画の佳なるものあれば則ちこれを模写す。廿三日には誓願寺縁起を写し、十一月十三日写し了る。この間又殆ど毎日諸寺社を歴覽せり十七日京都を發して宇治に至り、十八日鳳凰堂の壁画を地取り、十九日奈良に至り、廿日法隆寺を訪ひ、廿二日同寺三經院の太子縁起四幅の模写に著手し、慶意等を止めてこれを写さしむ。廿三日信貴山に上り、龍田、達磨寺を経て当麻に至り、廿四日当麻寺の曼荼羅及法然絵伝等を觀、廿五日橘寺、岡寺、飛鳥寺等を経て多武峰に至り、翌日多武峰の宝物を觀、廿七月初瀬、廿八日三輪を経て丹波市に宿し、廿九日布留社を経て、奈良に歸る。十二月朔日東大寺を訪ひて鴨毛屏風、楽面その他種々の宝物を觀、二日多武峰より齋さしめたる大職冠之図二幅を写し、三日これを了りて、又東大寺の宝物を觀る。既にして慶意等法隆寺の模写を了りて、來り會し、五日大坂に至り、六日天王寺等を觀、七日舟に乗りて大阪を發し、翌日再び京都に至り、十日東寺再び、十一日高雄山水屏風十二天等を觀る梅尾を訪ひ、十三日京都を發し、廿四日江戸に歸りぬ。屋代弘賢も亦この行に従ひき、その著道の幸あり寺社宝物展覧目録は、即ちこの時柴野栗山と住吉内記とが樂翁侯に復命せし書にして、卷末に「寛政四年十二月」と記して各々その名を署せり、(後略)

(12) 「住吉家鑑定控 一」(『美術研究』第三八号 岩波書店 一九三五年二月二八日)

(13) 本年十月から大和文華館にて「住吉広行―江戸後期やまと絵の開拓者」展が開催される予定である。

謝辞

『新增書目』や模写の熟覧においては、松浦史料博物館学芸員の久家孝史氏にご協力いただき、画像の掲載についても快諾いただきました。ここに深く感謝申し上げます。

(文学部教授)